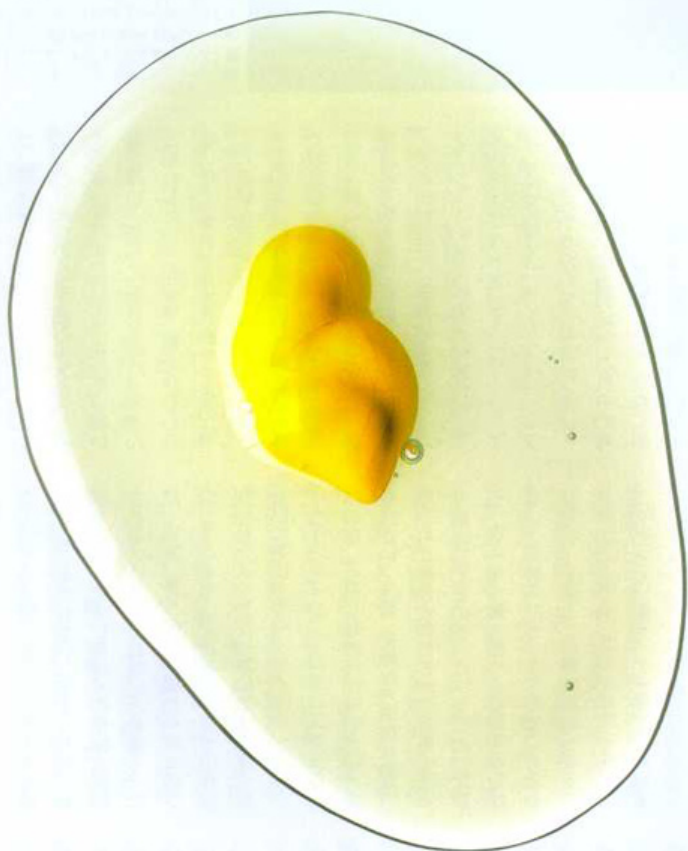


水彩 Technique。

メディウム！



新しいテクニックが新しい作風を生み出す、ということが水彩の世界でも始まっている。絵具自体を自作することで、水彩のタッチを変えたり、色合いに変化をつけたり、にじみを調節したり、マスキングをしたり、白抜きをする。メディウムを使うことで表現が変わっていきます。ホルベインから本格的な水彩用メディウムが出ました。専門店で。

<ホルベイン水彩用メディウム シリーズ> オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVグロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

小山穂太郎

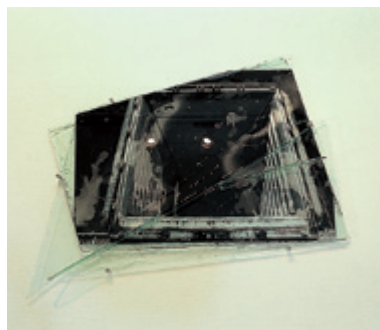
鷹見明彦

文 森田兼次 | 写真 * 印

Phantom / 幻影のほとと



1981年、東京芸大のアトリエにて。三脚とセルフ・タイマーで撮影したセルフ・ポートレート。写真による作品を試みるようになって、フィルム1本分の各コマに空間を分割して撮影し、あとで全体をつないで構成するような作品をつくっていた。



1983

「夜中にバイクで
東京湾の埠頭に行くと、
空っぽのコンテナが扉を開いて
停まっているのが目にとまりました」

「視覚涉獵」よ(トラックコンテナ
の後ろ扉 / 開いている) 1983
ゼラチンシルバープリント、透明
樹脂、ガラス 60×60cm

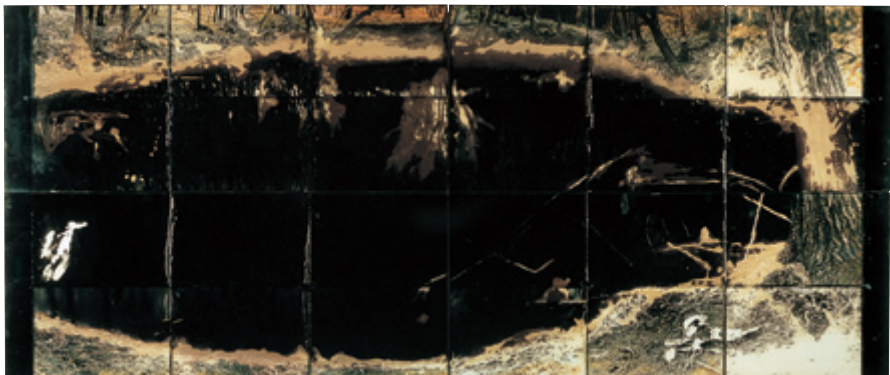
近年は、お台場」とも、ベイ・エリア」とも呼ばれて賑わう東京湾岸の埋立て地。テレビ局やショッピング・モールなど新施設の整備が進むゾーンから橋を渡って、フェリー埠頭のある地区に入ると風景が変わる。倉庫とコンテナのターミナルが広がる臨海地の道は、路肩にも停められたコンテナが列をつくっている。

「ここへは、学生のころからよくバイクで撮影に来ていました。20年前は、まわりにビルもなく殺風景な場所でしたが……」。

「高校は、都立校でした。70年代のはじめ、学園紛争後の自由な空気のおかげで、8ミリの自主映画を製作したり、トランペットを吹く友人たちがいて、自分は絵を描こうとしていました。そのころは、線で描く近代の日本画などが好きでしたね」。

美大の受験に向き合うようになったのは、働きながら美術予備校に通うようになってからだ。

「浪人期間が長かつたせいもあるが、



黒焦の池 1985 ゼラチンシルバープリントに漂白、
透明樹脂、ガラス、パネルほか 152×360cm 個人蔵

1985 「この作品は、黒い鏡のようですが、同じネガを使ったほかの作品では、水面のほうを漂白したり、焦がしたりしています」

予備校で絵を描くよりも、バイト先での日常の出来事や出かけた場所から感化されたことが多くあったと思います」。

「(受験でも)対象の印象や、かたちではない、絵になりにくい要素によって描こうとしましたが、最後はあっさり描いたら受かりました」。

2年目以後は独学で5年目の78年、東京芸大絵画科の油画専攻に入学。

「同級生には多浪の者も多く、授業は自由で放任という印象がありましたね。絵を描き上げる根拠がはつきりしないまま、事物に即した写真やオブジェに興味を向いていきました」。

「1年生のときの担任は、杉全直先生でしたが、間もなく辞められた後に榎倉康二(さか)さんが講師になって、2年生のときには、写真のゼミを取りました。学生時代には、技巧的な事柄よりも、物事への感応性を強く持った作家の核のようなものを意識させられました」。

《「視覚涉猟」より》トラックコンテナ



Phantom / 逃げ水 1998
16ミリフィルムと鏡によるプロジェクション

の後ろ扉ノ開いている》(1983)は、ガラス板に透明樹脂で封じ込めたゼラチンシルバープリントの写真の断片をインスタレーションした初個展の出品作。

「夜中にこのあたり(東京湾の埠頭)に来ると、空っぽのコンテナが扉を開いて停まっていたので、それを撮影しました。上野動物園の象や、谷中の墓地の灯籠のクローズ・アップなども撮りましたが、《魚の椅子》という作品では、実物のイワシや拾得

数百万回の光の打刻 / 境界 / 2003
2003-04 ストロボ光によるプロジ
ェクション

「みちのくアートフェスティバル
2003 (国営みちのくの社の湖畔公
園、ふるさと村「会津の家」宮城)で
の展示風景



物を壊れた椅子の上に封じ込めたりしました。

《黒焦の池》(1985)は、真つ黒になるまで焼き込んだ写真のまわりを漂白脱色して、ガラス板に封じた大作。引き伸ばし、焼き込んだプリ

ントの部分を手で削いだり、漂白したり、焦がしたりすることで、写真という界面に介入する小山の作品の特質が、全面的に展開されはじめた時期の一点である。「東京の郊外、狭山さやまの雑木林のなか

に水が滲み出したような池があつて、そこで撮影しました。この作品は黒い鏡のようですが、ほかの作品では、水面の方を漂白したり焦がしたりしています。また、一つのネガから異なったプリントを多数焼くことを試みていました。

「この頃は、薬品によつて焼き付けた写真の銀の質を退行させていました。普通の写真では、やらないことですが。」

《Pantone / 逃げ水》(1988)は、近年多く発表している16ミリフィルムと鏡によるプロジェクションのシリーズの一作。16ミリで手回し撮影した日常の風景をつないだ映像を、鏡面に投射して空間に映し出す。

「写真のプリントによる作品は、事物を写真として定着させた結果に対して、消したり削ったりしたとしても、その行為性や物質性を強調しながら、その行為性ともども定着されて残ります。それに対して映像は、時間のなかで変化を映し出しますが、光源を切れば消滅してしまふ。イメージや内容が光

2003

「うすい板のような光の線が、数百分の一秒という速さで発光し、空間を長い時間、打ちつづけます」



東京湾岸の有明埠頭にて。学生のころからよく撮影に来る場所の一つ。隣接するお台場とは、対照的な風景が広がっている。空っぽのコンテナは、旧作のモチーフになった【*】

こやま・ほたろう 1955年東京生まれ。82年東京芸術大学美術学部絵画科卒業。87年同大学院博士後期課程満期退学。94～96年文化庁芸術家在外研修員としてパリに滞在。99年より東京芸術大学美術学部 油画 助教授。主な個展に83,86年ギャラリー葉(東京) 89,90年ギャラリー21 + 葉(東京) 89,93年石屋町ギャラリー(京都) 86,92,93,98,2001年秋山画廊(東京) 02年栃木県立美術館ほか。主なグループ展は、87年「現代美術になった写真」(栃木県立美術館) 89年「ART TODAY 89」(軽井沢高輪美術館、長野) 90年「日本のコンテンポラリー・12の指標」(東京都写真美術館 / パヴィヨン・デザール、パリ)「移行するイメージ」(京都国立近代美術館 / 東京国立近代美術館) 90～91年「JAPAN ART TODAY」(北欧巡回) 94年「うつつこと」と「見ること」(埼玉県立近代美術館) 96年「レクイエム 榎倉康二追悼展」(斎藤記念川口現代美術館、埼玉)「フランスの現代写真」(ボンビドゥー・センター、パリ) 97年「時間 / 視線 / 記憶」(東京都現代美術館)「ART TODAY 1997」(セゾン現代美術館、長野) 2000年「アルル写真フェスティバル」(フランス)ほか。

に還元される瞬間や、光がその場にどう関与しているかに興味があります。
「16ミリを使うのは、フィルムに記録された光跡である映像の原質を強調したいからです」。

《数百万回の光の打刻 / 境界 / 2003》(2003)は、宮城県の国営公園内に移築された古民家の空間

を使ったストロボ光による最近作。2軒の家の内側にそれぞれ線と点に見える光を投射した。闇を溜めた古い民家の内部で、ストロボ光を半年のあいだ、発光させました。
「柱と梁の奥や葎葺き屋根の裏が見える板の間に、光の線を、薄い板を立てたように配置しました。光は、瞬きのように数百分の一秒という速さで発光し、空間を長い時間、打ちつけます……」。

コンテナ埠頭でのポートレートの撮影の後、お台場のホテルのロビーで話を聞くうちに、周囲はすっかり冬の宵闇に変わっていた。ガラスのむこうに落ちる流水のヴェールがライオンアップされて、点灯したベイ・エリアの光が交錯している。そのほとりを過ぎゆく者たちの影が、冬の逃げ水のように薄い闇の鏡面に重なり合っているのが見えた。

2004年12月14日、東京・江東区有明埠頭と港区台場にて取材

たかみ・あきひこ(美術評論家)